

ラジオと戦争

放送人たちの「報国」

サイパン島の陥落はどう伝えられたのか

サイパン島の我が部隊は、最高指揮官南雲忠一海軍中将以下、去る七日、最後の攻撃を敢行し勇戦力闘、一昨一六日までに全員壮烈な戦死を遂げたものと認められます。

サイパン島の在留邦人も終始、軍に協力しおおむね将兵と運命をともにした模様であります。

大本営、きょう午後五時の発表を申し上げます。

大本營発表。昭和一九年七月一八日一七時。

一、サイパン島の我が部隊は、七月七日早暁より全力をあげて最後の攻撃を敢行。所在の敵を蹂躪し、その一部はタポーチョ山付近まで突進し勇戦力闘、敵に多大の損害を与え、一六日までに全員壮烈なる戦死を遂げたるものと認む。

同島の陸軍部隊指揮官は陸軍中将・斎藤義次、海軍部隊指揮官は海軍少将・辻村武久にして、同方面の最高指揮官、海軍中将・南雲忠一また同島において戦死せり。

二、サイパン島の在留邦人は、終始軍に協力し、およそ戦い得るものは敢然戦闘に参加し、おおむね将兵と運命をともにせるものの如し。

終り。

「一死奉公」という言葉は常に雑作もなく使われているが、全国民が、このサイパン非戦闘員の沈毅壮烈なる最期に倣うだけの覚悟を決めて、ほんとうの「一死奉公」に徹するならば、戦局がどれ位重大化しても、日本の前途は少しの心配もない。この覚悟、この意気こそが最大の戦力である。

（「世界の戦局」より）

(三) 哭け怒れ 讃えよほめよ
武器とりて 起ち得る者は
武器とりて みな戦えり
後(しりえ)には 大和撫子
くれないに 咲きて匂いぬ

(四) 哭け怒れ 讃えよほめよ
代々(よよ)享(う)けし 忠武の血もて
旗じるし高く 揚げたり
仰ぎみて 同じところに
戦いに われら続かむ

沖縄特攻はどう伝えられたのか

(前説)

五月〇日（〇はマルと読まれている：引用者）、暁を
ついでに第〇次総攻撃。出撃の模様であります。出撃
実況、シマノ報道班員。

(実況)

決戦場・沖縄の戦いは青葉若葉の今日このごろ、ますます
激しく、戦局また●（一語聞き取り不能）としま
す。その前線に陸軍航空基地、昨日も今日も戦いの息
吹を一杯にたぎらせて、再び還らざる特別攻撃隊、ま
た翼を連ね、敵会戦を求めて飛び立ってゆきます。

4月1日、敵、沖縄本島上陸以来、敵の本格的上陸とともに、我が攻撃・反撃、俄然、猛烈となり。そして4月6日の黎明より、突如として切られた我が陸海の精鋭、特別攻撃隊、崇高作戦の火ぶたは、すでに切れり。

1945年 4月21日	「特別攻撃隊出撃」 ―前線某航空基地にて―
5月25日	海軍航空基地派遣録音隊 第一報「敵艦上機来襲」
5月27日	海軍航空基地派遣録音隊 第二報「我、敵空母に必中突入す」
6月4日	少国民の時間「特攻隊の基地を訪ねて」
6月6日	陸軍前線基地録音隊記録「出撃」
6月10日	「ある日の基地」（録音）―海軍前線航空基地にて―
6月13日	「神風神雷特攻隊総攻撃」―前線海軍航空基地にて―
6月19日	少国民の時間「振武隊の基地を訪ねて」
6月19日	「学鷲特攻隊員座談会」―海軍前線基地にて―
6月26日	「人に非ず弾に非ず神雷なり」～前線海軍航空基地にて～

「出撃の前の数日は、ひと時でもそのことを忘れたいのだろう。明日になれば二度と生きて帰てこられないのだから。そう思うだけで可哀想だった。

場末の飲み屋で深酒をあおって最後は前後不覚になり、口論や喧嘩が絶えなかった。これは軍の機密だったが知る人は知っていた」

(長澤泰治『NHKと共に七〇年 ―わが回想の九〇年』藤原書店、二〇〇八年、より)

「司令官をはじめ隊長が見守る中を、一機、
また一機と飛び立っていく。

中には、心の中の名状しがたい興奮のもって行き所がなく、滑走路を走り出してから、離陸できずに、爆破したものもいた」

ラジオの出発・満州事変

母たちは、手に号外を持っており、その前夜、九月十八日の夜中に満鉄が爆破されたので、日本軍とシナ軍との間で戦争がはじまったと書いてあった。それで母は、三年前にチョーサクリンの死んだときのことを憶い出し、こんども本当は日本軍が爆弾を仕掛けたにちがいないということを、得意になって近所の人たちに話していたところなのだ。

(安岡章太郎『僕の昭和史』講談社文芸文庫、二〇一八年)

日本としてはどうしても国論を統一して国難を打開して行かなければならぬ。当時放送事業の責任者であった余は、これには先ず放送を利用して、出来るだけ事件の真相を国民に伝えて、輿論の向かう所を明らかにしなければならぬと痛感し、此の方面の運動に乗り出したわけである。

(中山龍次『戦争と電気通信』電気通信協会、一九四二年)

一般講演、講座關係記録

此の一ケ年間のラヂオの講演、講座は擧げて對時局問題に集中されてゐたと云つても過言ではない。それは年鑑編纂年度の昭和六年十月より七年九月と、滿洲事變の突發より、滿洲國の建國、我國の承認の一ケ年との偶然の一致にも依るのであるが、その間に於ける一般講演、講座、時事並に時局講座、B Kの恒例日曜日の時事解説及び滿蒙事情或は中部支那事情特別講座の諸活動が、滿蒙の正當なる認識を我國民並に諸外國に徹底せしむる爲の國家的使命に傾倒した輝ける記録に他ならないからであつて又滿蒙問題の重要性を裏書きするものである。

教育機關としてラヂオは未だ學校教育の補助的手段として考へられてゐる

に過ぎないが、所謂教養ある民衆を創り成し、民心の歸趨を指示するに有効なる手段たる點に於ては他の如何なる文化機關に對しても絶対に優越の地位を確保する事は、殊に今次の時局に際會して顯揚せられた偉績に徴して明らかであらう。

今曆順に關係記録を蒐録するに當り事變突發直後の昭和六年九月十九日に我がラヂオは、時事新報社主催「中華民國水災同情の爲の講演並に演奏會」の實況を日比谷公會堂より中繼し、時の内相安達謙藏氏の「中華民國の水災に就て」の我が友邦中華の不慮の災害の爲國民一般に親隣の誼を説くの講演、次で「清元忍逢春雪解」筆曲「東獅子」長唄「新曲浦島」を傳へつつあつた

平和なる情景をその後の劇期的プログラムに對比して想起するのである。

◇一般講演講座

題 目	放送場所	年月日	發局
日本と滿洲との歴史的關係	中島利一郎 六八、六三		A
中村大尉及井杉曹長を憶ふ	建川美次 六六		A
滿洲事變と對外國關係	河野三通士 六七		B
「特別講座」滿蒙問題研究	池崎忠孝 六八、三十一		B
英支關係三大問題と我が綿業界	喜多又藏 六八、六		B
南嶺寛城子に於ける歩兵第四聯隊の行動に就て	中村謙二 六八、八		H
滿蒙の近情	永雄策郎 六七、七		A
重大なる時局と護國の神靈	中野直枝 六八、三		A
恐るべき空中文明戰	長岡外史 六五、五		A

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
若し敵機 日本を襲はば	和 田 盈	六、十、廿	B
滿洲事變と 滿鐵の將來	齋藤良衛	六、十、廿	A
最近の 滿蒙を見て	人見順士	六、十、廿	I
支那の 馬賊と軍隊	人見順士	七、一、廿	I
滿洲戰線を 慰問して	阿部賢一	八、一、廿	A
現下の諸問題と 國民の覺悟	松村松年	八、一、廿	I
南嶺の戰闘に就て	井上辰雄	二〇、一、廿	A
滿蒙問題の 重要性に就て	小磯國昭	二、一、廿	G
戰爭と科學	緒方勝一	四、一、廿	G
滿蒙の資源	原岡 武	五、一、廿	I
滿洲古代遺跡を 探査して	島居龍藏	七、一、廿	A
滿洲事變と 支那人氣質	中野江漢	九、一、廿	A (二)

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
滿蒙事變關係各 國の國民性に就て	上石保教	六、十、廿	G
亞細亞に還れ	森 恪	六、十、廿	A
滿洲事件に就て	中山 優	六、十、廿	A
支那の民族性よ り見た滿蒙問題	五十嵐房吉	七、一、廿	I
滿洲事變の核心 と其解決の機會	矢野仁一	七、一、廿	B
現代支那 青年の思想	永持徳一	七、一、廿	A (二)
滿蒙の富源を 巡る民族の消長	田中末廣	七、一、廿	A
滿洲の委滿洲と はどんなところ	奥田正男	七、一、廿	C
支那の貿易と 列國の消長	小樽富商教授 吉米地英俊	九、一、廿	I
冬季に於る滿洲 軍の衛生狀態	合田 平	六、十、廿	A
國防と國民衣服	財部 泉	一、一、廿	B
滿洲に於ける 日支關係に就て	ヒュー・バイアス	二、一、廿	A (二)

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
滿蒙問題の 經濟的考察	保田莊一	六、十、二	B
滿洲より歸りて	安倍季雄	二、一、廿	H
滿蒙の戦線に 東北の兵士と辛 苦を共にして	荒垣秀雄	三、一、廿	H
滿蒙講座「滿洲 事變前後の眞情 於ける北平の眞情	鹽澤清宜	三、一、廿	F
滿蒙講座「滿洲 事變前後の眞情 於ける北平の眞情	山口富商教授 西山榮久	四、一、廿	F
滿蒙の資源	野添孝男	四、一、廿	B
奉天を中心とし 滿鐵の使命と將來	齊藤良衛	五、一、廿	A
對米時局放送 滿洲情況のニュー リス蒐集に就て	米田通司 マリス・ガブリン	五、一、廿	A
U・Pは斯く扱ふ	ロレンス・グレイ	八、一、廿	A
滿洲に於ける 日支協力に就て	ジェームズ・ベンリッセン	八、一、廿	A
滿洲事變と 日支の財界	渡邊鐵藏	九、一、廿	A

業績大観：時局とラヂオ

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
滿洲事變より見たる兵器	陸軍省兵務局長 植村東彦	六・二〇	A
滿洲戦線を慰問して	陸軍省兵務局長 野田松平	七・一〇	A
滿洲事變の推移	陸軍省兵務局長 小田井敏子	七・一〇	A
滿洲軍の推相	陸軍省兵務局長 建川美次	七・一〇	A
滿洲軍の推相	陸軍省兵務局長 浅香末起	七・一〇	A
滿洲に於ける我國の特権	陸軍省兵務局長 和田禎純	七・一〇	A
滿洲の政局	陸軍省兵務局長 坂西利八郎	七・一〇	A
「青年講座」	陸軍省兵務局長 金原信泰	七・一〇	A
滿洲の鐵物	陸軍省兵務局長 武富邦茂	七・一〇	A
滿洲事變と我軍	陸軍省兵務局長 本多熊太郎	七・一〇	A
故小村大蔵卿と滿洲	陸軍省兵務局長 菊池次郎	七・一〇	A
在滿軍の慰問使の話	陸軍省兵務局長 宇佐美勝夫	七・一〇	A
滿洲の資源	陸軍省兵務局長 岩崎重三	七・一〇	A
滿洲鐵産物の由來と將來	陸軍省兵務局長 岩崎重三	七・一〇	A

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
「滿洲講座」	陸軍省兵務局長 新渡戸稻造	六・二六	A
滿洲に於ける皇軍の活動	陸軍省兵務局長 杉浦謙次郎	六・二六	A
滿洲の過去と將來	陸軍省兵務局長 重藤千秋	六・二六	A
國民の空軍	陸軍省兵務局長 堀 丈夫	六・二六	A
擴張熱に答ふ	陸軍省兵務局長 堀 丈夫	六・二六	A
「青年の時間」	陸軍省兵務局長 各學校代表	六・二六	A
滿洲の實情を視察して	陸軍省兵務局長 二宮治重	六・二六	A
「滿洲講座」	陸軍省兵務局長 米田 實	六・二六	A
政治史より見たる滿洲	陸軍省兵務局長 天谷直次郎	六・二六	A
滿洲の鐵物	陸軍省兵務局長 江見水蔭	六・二六	A
「趣味講座」	陸軍省兵務局長 齊藤良衛	六・二六	A
日清戰役當時の支那兵	陸軍省兵務局長 齊藤良衛	六・二六	A
支那の條約無視	陸軍省兵務局長 齊藤良衛	六・二六	A
楊子江方面に於ける帝國海軍の整備状況	陸軍省兵務局長 紫山昌生	六・二六	A

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
錦州討伐に従軍して	陸軍省兵務局長 横田高明	七・一三	B
愛國飛行機完成の感謝	陸軍省兵務局長 大江亮一	七・一三	B
飛行機愛國感謝を迎へて	陸軍省兵務局長 若竹又男	七・一三	B
在滿同胞に代りて感謝と希望	陸軍省兵務局長 上田 統	七・一三	B
滿洲の時局と馬	陸軍省兵務局長 梅崎延太郎	七・一三	B
最近の上海	陸軍省兵務局長 米窪太刀雄	七・一三	B
「滿洲講座」	陸軍省兵務局長 中野正剛	七・一三	B
滿洲の人情風俗	陸軍省兵務局長 内海安吉	七・一三	B
滿洲事變に對する國民の感謝	陸軍省兵務局長 杉山 元	七・一三	B
光輝ある皇國の軍旗	陸軍省兵務局長 井上 一	七・一三	B
小倉○國軍に就て	陸軍省兵務局長 井上 一	七・一三	B
砲兵に從軍して	陸軍省兵務局長 溫勢辰雄	七・一三	B
滿洲にはどれだけの民族が居住するか	陸軍省兵務局長 鳥居龍藏	七・一三	B

業績大観…時局とラヂオ

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
國防と馬	陸軍大監市橋 荒木貞夫七、廿四	廿四	A
滿洲出征軍人へ慰問の辭	野澤重三郎二 時 樂 壽	廿四	S
滿蒙の産業事情	陸軍少佐 遠藤壽儼	廿七	A
滿洲に於る日本青年の活動	陸軍少佐 濱田純一	廿八	A
東部内蒙古の現状に就て	陸軍少佐 仙臺基徳	三〇	A
滿洲の治安と警備	陸軍少佐 三浦嘉門	三〇	H
獨立守備隊の最近支那各地に生起せる日支事件に就て	陸軍少佐 柴田善次郎	三二	A
上海事變に就て	陸軍少佐 神尾 茂	三三	B
國民防空の急務に就て	陸軍少佐 宇山熊太郎	三六	A
滿洲の貨幣と金融	大蔵省主計官 梅崎 壽	三六	B
國防とラヂオ	陸軍少佐 河村恭輔	三七	I

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
長江と我海軍	特別講座 長江軍艦工廠 長江軍艦工廠 荒城二郎	廿二	A
支那本部に於る政局の動き	陸軍中將 坂西利八郎	廿二	A
佛教と戦争	陸軍士官學校 教員 古川確悟	廿三	A
漢口上流に於る各開港場と日本	特別講座 田中莊太郎	廿四	A
上海を中心とせる日本の企業	特別講座 中日實業株式會社 高木陸郎	廿四	A
上海に於ける各國人	特別講座 外務省通譯 清水重三	廿五	A
長江の航運	特別講座 日本汽船會社社長 深尾隆太郎	廿七	A
死線に立ちて戦況報道に活躍する人々	後藤武男	廿八	A
滿洲歴史の一節	文部 中山久四郎	廿八	A

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
滿洲に於る社會事情	中南定太郎七、三三	三三	A
上海の金融と爲替事情	特別講座 三井銀行外國部長 土屋計左右	三三	A
長江流域と日本との貿易關係	特別講座 大蔵省通譯 飯田信夫	三三	A
私は新滿蒙國家を斯う見ます	陸軍少佐 和信夫	三三	A
上海附近の地形に就て	特別講座 陸軍少佐 柴山兼四郎	三六	A
「滿蒙講座」我國の人口問題と滿蒙の獨立と承認	特別講座 大蔵省通譯 飯本武雄	三六	B
滿洲に於ける資源と最近滿洲の交通事情を視察して	特別講座 陸軍少佐 山根新次	三八	L
道難談「上海の最前線にて」	古市美津雄	三九	B

業績大観……時局とラヂオ

題	日	放送者	年月日	発局
上海事變に就て 列國の誤解を解く	七、三	高岩勘次郎	二	A
滿蒙と農事移民	二	橋本 傳左衛門	B	
滿蒙の鐵物資源	三	村上 銀藏	A	
三勇士の傳を 偲びて	四	安部幸二郎	L	
支那の將來	六	大谷光瑞	R	
奉天大會戰に於 ける軍神吉岡大佐	七	小山永行	A	
爆彈三勇士 を語る	七	新宮壽天丸	B	
全滅せる松尾部 隊を偲びて	八	加納實造	A	
日支紛糾より見 たる我國の防空	九	二子石堂郎	A	
陸軍記念日を 迎へて	十	中川金藏	H	
滿洲の前途 其の使命と責任	十一	矢野仁一	B	
上海の戦線 を視察して	十二	武富邦茂	A	
趣味講座 日支衝突軍艦動	七、三、四	永見徳太郎	A	
趣味講座 遠征動	七、三、四	川口 陟	A	
實戰に於ける 日本刀	七、三、四	川口 陟	A	
愛國精神 宣揚の夕	七、三、四	鈴木莊六	Q	
愛國精神の宣揚	七、三、四	鈴木莊六	B	
上海派遣九州部 隊の奮戦を語る	七、三、四	原田 弘	S	
時局の總決算と 青年訓練	七、三、四	中村正一	G	
上海に於る皇軍 と居留民の協力	七、三、四	三島通陽	A	
滿洲國の協力を 偲ぶ	七、三、四	後藤武男	A	
蒙古の話	七、三、四	下永憲次	A	
趣味講座 拾つた笑話	七、三、四	堤 寒三	B	
挨拶	七、三、四	栗田小三郎	S	
青少年講座 滿洲語について	七、三、四	川瀬侍郎	A(二)	
故林聯隊長 を偲ぶ	七、三、四	志道保亮	B	
滿蒙移住に就て	七、三、四	遠藤壽銀	A	
故林少將を 偲びて	七、三、四	小磯國昭	A	
宗教上より 觀たる滿洲	七、三、四	大乗大圓	B	
滿洲國民に告ぐ	七、三、四	溥 傑	A	
上海に於る皇軍 と居留民の協力	七、三、四	三島通陽	O	
經濟學者の觀た る黎明の滿洲國	七、三、四	石井静人	A	
滿蒙と文學	七、三、四	佐藤惣之助	G	
滿洲開發と 邦人の投資	七、三、四	板橋菊松	A	
黎明滿蒙と日本	七、三、四	寶生確成	A	

業績大観……時局とラヂオ

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
佛教的精神文化 と滿洲國	中山久四郎	七、四、三	A
滿蒙の旅行 に就いて	高砂政太郎	七、三	C
勸諭下賜五十年 記念祝典を迎ふ るに方り吾人國 民の覺悟を遂ふ 軍人勸諭下賜五 十周年を迎へて	木村恒夫 藤田義雄	七、三 七、三	H I
事變と滿蒙貿易 時局の 重大性に就て	生田磯治 佐藤清勝	七、三 七、三	C A
新滿蒙の 經濟的打診	東本勇之助	七、三	B
内憂外患の對策	大菱 毅	七、五、一	A
時局と我日本人 の大覺悟	邊見勇彦	三	A
趣味講座 滿洲で拾つた	眞鍋儀十	六	A
戦争と防彈 チヨツキ	本多光太郎	六	H

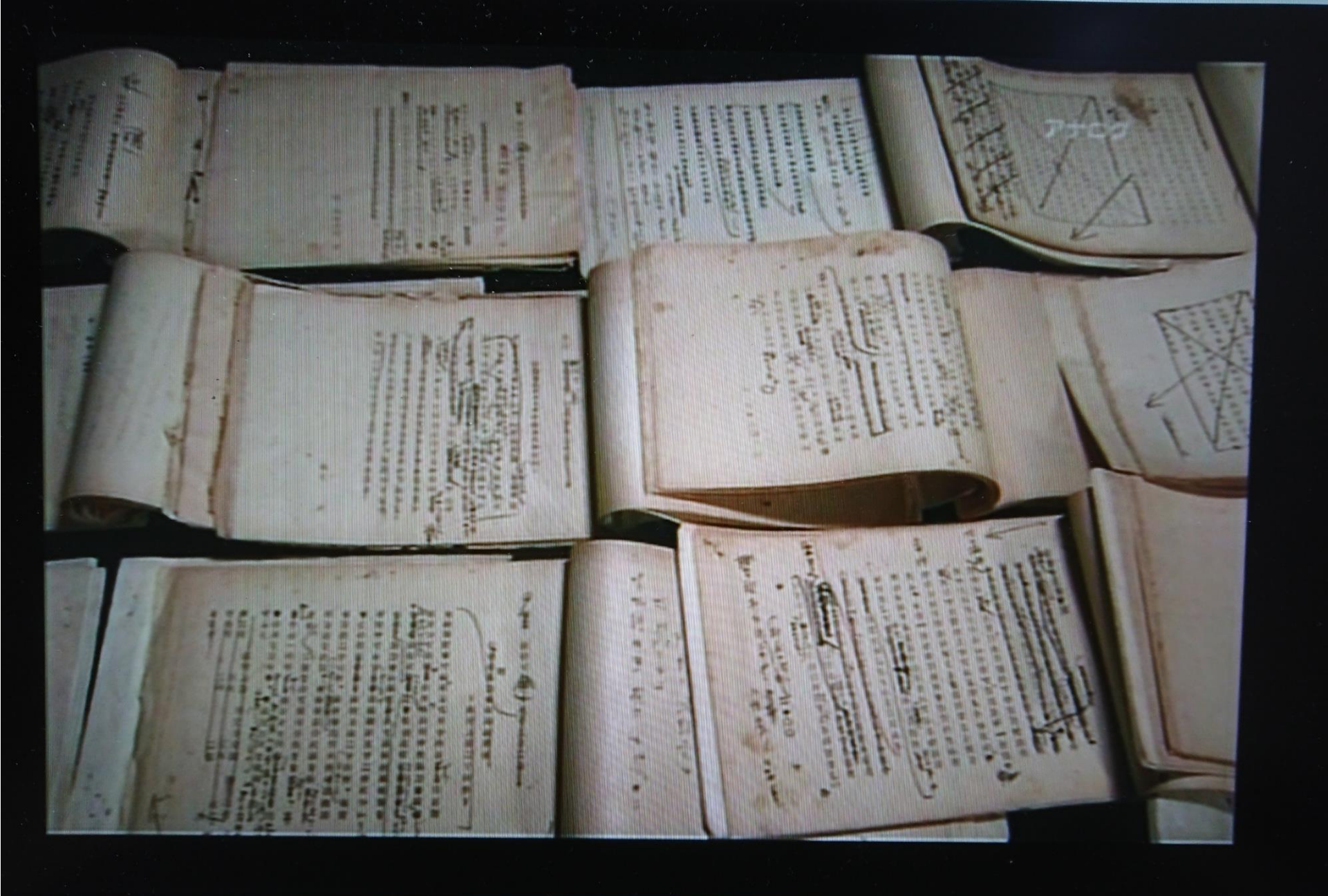
題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
上海事變の經過 とその後の經濟 問題	高岩勘次郎	七、五、八	L
各國防空事業 の現況	石井作次郎	七、五、八	A
第九師團の 凱旋と博覽會	市川 潔	七、五、八	J
最新救艦一萬噸 巡洋艦の權威	一色建之介	七、五、八	B
滿洲事變と新聞 通信飛行機の 視察して	酒井憲次郎 三浦伊八郎	七、五、八 七、五、八	Q A
銃後の授け	小泉六一	七、五、八	A
滿蒙の實狀	森 富太	七、五、八	A
趣味講座 海軍の今昔	廣瀬彦太	七、五、八	A
國運を賭したる 日本海海戦	安保清種	七、五、八	A
新滿洲國の解剖 經濟的に現狀を に就て	秋山豊三郎 野添孝生	七、五、八 七、五、八	A B

題 目	放 送 者	年 月 日	發 局
日本と新滿洲 との民族關係	島居龍藏	七、六、一	A
滿洲國の將來 ハルビンを中心 とする北滿洲に 於ける舊軍閥の 虐政の實情	土肥原賢二	七、六、一	A
上海事變に關し て全國の皆様に 未來の空中戦	植田謙吉	七、六、一	J
滿洲讀本	鈴木徳成	七、六、一	C
滿洲の 海關稅問題	下田將幸	七、六、一	B
凱旋記念 上海實戰談の夕	永田市長 植田中將	七、六、一	A
郷土訪問より滿 洲新京訪問飛行	尹昌鉉	七、七、五	A

次第に日本の国論は統一し得たので連名理事会に於ける一三対一、又本会議に於ける四二対一という最悪の場面に直面しても、国内の輿論は完全に一致して微動だもしなかった

(中山龍次『戦争と電気通信』電気通信協会、一九四二年)

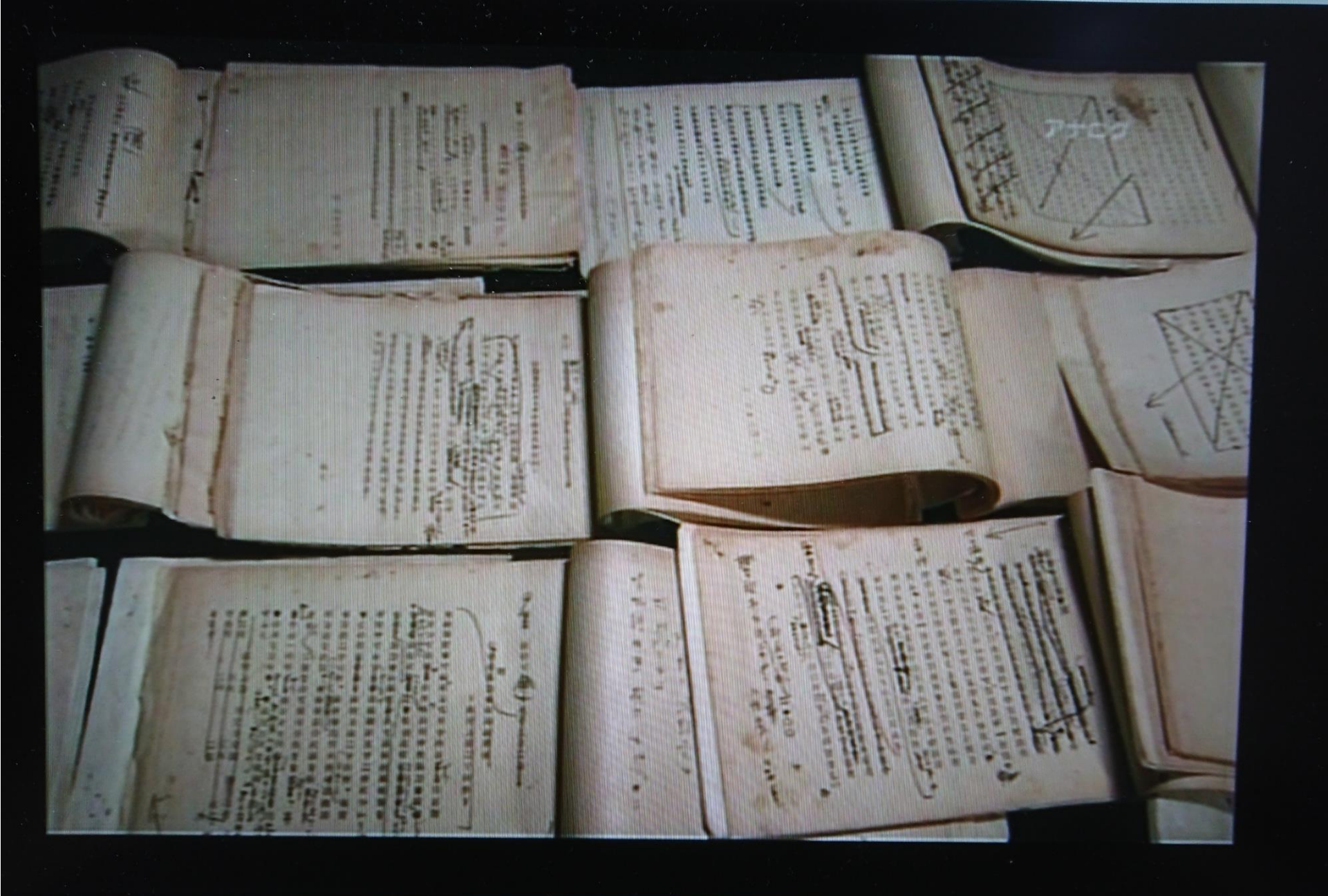
ニュースはどう作られていたのか



「同盟通信を使っても同盟通信以上の国策的効果があがればよい」

「我々編集者は常に同盟通信以上の効果をあげるために工夫し努力しなければならない」

（田中「編集者の内省」 『放送研究』 1942年4月号）



卷之七

第一條の兵隊の意思

アノカ
兵

は
瀬
洲
兵

12. 名

1

歐洲兵燹後

部兵に分り

戰術的配

支那以下であると言つて居り、全般的に見

て兵の素質は問題外であると言ひ切つて

あるが、問題に就ての飛行機であり、大電力

である。そして、日本軍の強さと待遇を

よ

て居り、決して日本軍の側へ近寄つ

て來ない
運接護國では必ず敗れる。

のてあゝの生歩具の近接を達けす。

實験圖 火砲の威力をなすつてみるの事

ある。だがアメリカの歩起は、

流石文巧

卷之十一

卷之六

卷之四

手尾
引きたるは

[illegible]

1

庚

夕

いぬさとの舌境に立つのであつた、野郎に
は劣つてゐる、だが敵の穴に、銃眼に隠れ
されてゐるのである、
軍情無事に軍力を動かしてゐるものである、そ
して新たなジャヤタルを求めざるを事をか
つたのである、こゝでは既に満ちた敵と
この陣が振舞ひられてゐる、おれにもう
少しの戦があれば血の方で敵の戦を感得す
ることの出来るのである、だが敵はあつた
いふ敵の戦に感得されねばならぬ、
いふ敵だ、戦さへあれば、この敵の戦は、
時にして一蹴することが出来るのである、

そしてこの敵は自ら戦で火砲を動かしてゐる、
弾丸を動かして貰ふ、そしてそれを前線に送
つて貰はねばならない、戦が、する火砲と
弾丸の生産力と、戦が問題であり、そして多
くの飛行機を送ることが最も大事なことを
である、飛行機では敵味方が不意に、
した敵は、敵の火砲に、

戦く 衆

昭和十九年九月

放送報道編輯例

社団法人
日本放送協會

例文 十八

昭和十八年七月二十三日正午

ソロモン群島ニュージョージア島に上陸を企てたアメリカ軍は、ムンダ方面のわが守備隊の勇敢奮闘の前に、或は前進を阻まれ、或は殲滅され、散々な苦戦に陥つてゐます。この苦戦の様子は、米英側の新聞報道も、「アメリカ軍は過去三十六時間少しも進出してゐない」と、傳へてゐる有様ですが、ブエノスアイレスからの同盟電報によれば、敵反樞軸軍司令部も、事實を

同盟 外信二十一號

日本軍の反撃を認む

ブエノスアイレス二十二日發同盟
反樞軸軍司令部は、二十二日の公報において、ムンダ基地における日本軍が米軍に對し反撃を加へた旨發表した。

かくし切れず、きのみの公報の中で、

「ムンダ基地の日本軍は、アメリカ軍に反撃を加へた」

と、澁々發表してゐます。

説明

例文十七と同様に之に先立つ報道との關聯を明かにする説明を加へてゐる。前報道については、常に念頭におかなければならぬ。

敵の發表が或は欺瞞であり、或は頰冠り主義であること等を説明することによつて、敵の發表を誤解の心配なく傳へることができる。

井埜久満「編集課の一週間」一九四〇年八月

最後に新体制の樹立と共に放送ニュースはどう進まなければならない
いか。

これは今後というよりはいま直ちに解決してしまわねばならない問題である。全くの私見であるが、此の際、客観的編集方針は須く一擲して、国家意思を盛った主観的編集方針の確立を必要とする考える。
。

田中「七時のニュース」一九四一年九月

それから国策放送の色彩を濃厚鮮明にする為には、
ラジオが持つ国家的使命の重大性に鑑みニュースの客観性という従来の範疇から更に前進し、国家の意図や国家の正しい主張といったものを積極的に織り交ぜ、国策を強烈に反映せしめて行かねばならない。
。

安藤「宣伝戦とニュース」一九四二年七月

国民に対する聖戦の意義、国策内容の闡明、国民の鉄石の団結と聖戦完遂の挙国的決意の昂揚、並びに国民士気の振作等が戦時下の放送目的である事は言を俟たない所であるが、報道の分野に於いてこの目的を果たすのに最も役立つものはニュースによる輿論の指導であろう。

飯田「ニュースの立体化」一九四三年四月

この場合ラジオニュースが平板的だとか立体的だとか云う問題は結局、報道性と宣伝性が有機的に聴取者に働きかけるか否かに帰着すると云えよう。

従ってラジオニュースの基本的方向は飽くまでリアリズムであり、ニュース編集者は集团的イデオロギーの指導（指導者？：引用者）たるべきである。

ラジオと戦争

放送人たちの「報国」

何が変わらなかったのか



従来放送は、長い間、国策遂行の為の手段的役割を果たして来た。此のこと自体が誤っているわけではない。問題はそれが如何なる国策の遂行であったかに存する。

（田中耕太郎「濫用時代から利用時代へ」『放送』1946年1月号）

ラジオと戦争

放送人たちの「報国」

